

社会福祉の立場から考える「ヒューマンケアの実践」

関西福祉学大学社会福祉学部

平松 正臣

1. 看護とヒューマンケアについての考察

ICNによれば「看護とは、あらゆる場であらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、対象がどのような健康状態であっても、独自にまたは他と協働して行われるケアの総体である。一中略一」と定義している。（日本看護協会 国際部訳）

つまり、看護とは、看護者と病気である人の間で行われるケアの総体と理解できる。人間を心身両面にわたってホリスティックに受け止め、人の命に対して畏敬の念をもって対峙することである。

次に、今回のテーマである「ヒューマンケア」とは、人間を多くの中の一人としてではなく“今まさにここに存在する”世界の中にたった一人しかいない、唯一無二の存在としてケアすることに他ならない。

それは、哲学的・宗教的なまでの意味合いを持つ極めて崇高な意味を根底におく理念である。しかし、またそれは看護活動という日常的、実践的活動の中で、ありふれた当たり前の行為や態度として表出するのである。

2. ソーシャルワークにおける支援のあり方に対する省察

私はかつて、社会福祉の根幹をなす人権思想や人間の尊厳という考え方が、他者との出逢いの中で生じること、さらに、その出逢いは私自身でも他者でもない、崇高かつ聖なる第三者の存在との関係を想定し共有することで可能となることを論じた¹⁾。きわめて曖昧な表現ではあるが、その第三者の存在＝もう一人の私との関係において、支援者は自己の存在の「小ささ」や「弱さ」を痛感し、悲しいほどの「非力さ」を自覚し、「他者を助ける」という心の傲り、傲慢さを可能な限り捨て去ってしまわなければならない。そして、その自己認識が他者に対する限りなき愛の実践として結実し、支援者と利用者の「相即不離」の関係への構築へとつながるのである。私自身の内において、私を私として存在せしめている自らの根拠に対しての探求を行うことは、必然的に、例えば宗教における「神」や、あるいは「自然」そのものへの畏敬などといったものを想定せざるをえない。社会福祉に哲学がないといわれて久しいが、支援者達にとっては、自らの存在や実践の根拠を探求する機会がますます奪われていく状況が続いている。

3. ヒューマンケアの実践

看護とソーシャルワークのケアをそれぞれの領域毎に、全体とは言えないにしても概観を試みた結果、両者とも他者に対する極めて崇高な存在としての認識と実践活動における、彼我の相即不離の関係性という点での一致をみた。

ヒューマンケアの実践において、私たちに今一度求められることは、看護と福祉における理念や活動を支える根拠は何であるのかについての探求であるように思われる。

1) 平松 正臣ら著 「現代の社会福祉」；日本経済評論社（2009）